

〔書評・紹介〕

国語学会編

## 『国語学大辞典』を評す

佐藤 茂

『国語学大辞典』の書評の依頼のあったのは昭和五十五年の暮、クリスマス・イブの日であった。爾来半年余、一通り二通りは拝見したつもりであるが、隅々までの熟読とまではまだいいたらない。しかし締切も目睫の間となつたので、指定された二十枚程度に立向ふこととした。僅少の枚数のこと故、いたらざるは御海容ねがひたいとまづはおねがひしておく。

旧版の『国語学辞典』に対して、この度のは『大』が追加されてゐる。国語学そのものには大も小もあるまい（安藤正次『小さい国語学』もあつたが、書名である）。この『大』は本の大きさといふ程度位に考へて、特に『大』そのものについては考へぬこととする。

評者が評議員たりし頃、相当以前よりの評議員会にて、関係者より屢々本辞典の進行状況につき報告があつた。その頃からのことを思ふと、昭和五十五年九月刊行といふのは予定よりは恐らく大幅のおくれであつたらう。しかし評者はそんなおくれは全く気にとめない。かかることに拙速は大禁物と考へるからである。結果的にいいものが出来れば何年おくれでも一向にさしつかへない。

まづ本辞典の目的は如何に、また読者・利用者の対象を奈辺において編んだのであらうか。例言には中項目主義をとり、小項目もあはせたと見える。中項目、小項目といふときの△項目▽は研究分野・書名・人名その他種々の場合があらう。それぞれの内容により異なるのあるのは当然である。ただそれらの中項目ときに小項目は互に如何に結びついていくのか、それら相互の関連は如何にあるのか、そのことは本辞典全体を鳥瞰したときには肝要なことと私考するが、評者不敏にしてそのあたりの不明確な点が少なくない。

その不明確と感ずることの因由を一往考へてみた。国語学に限らぬが、何々学と称する以上、一つのれっきとした学問であることいふまでもない。国語学は国語学としてのれっきとした存在であり、同時に言語学の一科たることに異論のある方はあるまい。

学問としての国語学は当然その学としての体系をもつ。その体系はそれぞれの学問、すなはち国語学は国語学としての体系であるが、その体系の樹立・展開などなどのことは、その学問に従ふ個々の人により、いはば個人個人により考へられてゐるのが、特に人文系の学問においては普通であらう。

なき山田孝雄先生が「自分は国語学概論はかかない」といはれたとかを仄聞したのはもう相当以前のことである。そのとき二十代だった評者は、概論といふものは個人のかけるものではないと思つた。その後四十年余を経過した今日においては、概論はむしろ個人がかくべきものであると考へてゐる。

山田先生がいはれたと伝へられた概論は、国語学のすべての分野につき説きつくすことをいはれたものであらう。そのことはたしかに今日も不可能に近い状態といへよう。一方概論といふものをその学問の体系を示すと考へるならば、個々若干のことにつき不備あるにせよ、自分はかく考へるといふことを国語学全般に亘つて示すことが、研究者としての責務とも考へられる。

そのやうに考へてくると、本辞典の二八〇余名の執筆者には二八〇余の体系ありともうけとりうる。個々の項目にはすべて執筆者名がしるされてゐる。それぞれの項目の責任がそれぞれの執筆者にあることを明示したといへよう。しかし二八〇余名の執筆者が何度か一堂に会して、執筆以前に打合せなり、討論なりをすることは恐らくなかつたらうと推察する。そのことはのちに言及する予定のたとへば〔参考文献〕の示し方において精粗まちまちの点の少なくないことから想像できるのである。編集委員の方々は当然何度かあつまり、打合せをかさねたであらう。項目・執筆者を決定し依頼する。その後の種々の苦勞は十分に察しうるつもりである。

さきにするした体系のことは十数名の編集委員の間においても、二八〇余名の執筆者のことと同じことがいへるであらう。その結果本辞典のねらひは如何なるところに落ちついたのであらうか。これには種々の場合が考へられる。しかし結果的には例言の冒頭に示さ

れた、

この辞典は、国語学に関係ある項目千六百余について解説し、更に、数種の参考資料を、付録として添えたものである

に集約されると思はれる。とすれば、千六百余の項目の立て方、解説の姿勢・内容、それらの編集・執筆のことにすべてがかかつていくことにならう。

解説といふことになると、どのやうな人を対象として、あるいは目安〔『言語生活』三五五号の林大「目安という語」参看〕としてしるすのか、その対象と相関連して国語学に関係ある項目を如何にきめるのが、本辞典の中心となると察せられる。

利用者としてすぐ思はれるのは、国語学に志したばかりの学徒、あるいは隣接諸言語の学徒、国文学・国史など日本関係の学徒であらう。ついで国語学専門の研究者とならうか。此頃はマスコミ関係の中にも相当熱心な方があるから、この方々も利用者としては大事である。

本稿を草すするための参考として、若干の大学の学生に利用の感想をきいてみた。専門家の二三の方にもたづねたことがある。さうした方々に共通するいくつかがあった。

最も多かったのは、引きにくいVといふことだった。その原因はどこにあらうか。旧版においては、はじめに「項目一覧表」が二八ページにわたつて示されてをり、辞典全体の組織を知ることができた。そのことは、自分の引きたいところがどのやうな場所にあるかを察知しえたわけである。このたびは、かうした一覧表は省かれてゐる。

そのことを評者は編集委員の一人にもたづねてみた。何故、一覽

表を省いたのかと。答へは一覧表は省いたが、その代りに索引があるとのことだった。索引は当然旧版にもある。この種のものに索引のあるのはあたりまへのことである。索引は一覧表の代用とはならないのではないかと反問したら、その通りであるとのことだった。

学生の中には、本辞典よりさきに刊行された『国語学研究事典』と併用しての感想といふのもあった。このことは今後の改訂の上にも参考とならう。「項目一覧表」いはば全体の組織を示さなかったのは、個々の項目の解説が重点といへばそれまでであるが、しひて付度すれば編集委員・執筆者の間に、全体の組織を示すときの合致した見解がとりにくいと思はれぬこともない。その付度がすこしでも当ってゐるとすれば多数執筆の弱点ともいへるであらうか。

〔参考文献〕についての望蜀の感も少なくない。学生の中にはまづ〔参考文献〕をみるタイプがある。そのいいわるいは別として、そのやうなタイプの学生の少なくないことは事実である。さうした学生たちのためには、〔参考文献〕の示し方は懇切であるにこしたことはない。全体的に見ると、いいものあり、簡単すぎるものあり、要はムラがありすぎるといへる。その責は個々の執筆者にあるのか、編集委員にあるのか存知せぬところであるが、再考の要は大いにあらう。

右のことと内容的に関連するので、具体例をあげると、三八八―三九三ページにわたり「国語教育の文献」の項目（飛田隆）がある。この六ページは項目名のせるにもよらうが、ほとんど文献名の羅列である。一寸言ひにくいことではあるが、この数ページは甚だよみにくい。かかる羅列よりはもう少し見やすき表記方法があつてよかつたのではあるまいか。試みに該ページをひろげてみられよ。

〔参考文献〕との関係からいへば、項目の中にはいくつかの書名・人名がある。これら書名・人名の項目の立て方は当然編集委の意向であらうが、評者の見るところ、いくつかの合点しかねる面がある。二三の例をあげよう。

評者のさつと見た感じでは、現代ならびに現代に近い方には相当の数の見うる（中にはあげるまでもなきもの、なきにしもあらず）のに対し、大正・明治、更に近世・中世……と溯るにつれて簡略化したかの思ひがする。

二九九ページに「言語学的日本文典」の項目（佐藤喜代治）がある。簡潔な解説があり、「付記」として著者岡沢鉦治先生の略伝がある。一言にてつくせば、岡沢先生についてのことは簡にすぎる思ひである。岡沢先生が評者の恩師であり、一生の師たることこの個人的思ひからのみの感想ではない。

『言語学的日本文典』に先行する著書はいくつもある。すなはち鉦次郎といはれてゐたときのものに『新日本文典原理 一名理論的日本文典』（明治四十年一月刊）あり、また『教科日本文典要義』（明治四十一年七月刊）がある。これらの著に先立ち『帝國文学』誌上に上田万年とのP音考論争ありしは周知のこと、そのあとの著述として右の二書を直ちにあげうる。特に『日本文典要義』に付されし「学典文学参考書」のリスト（二七ページにわたる）は瞠目に価するといへよう。このリストを拝見したときの旧制二高生の評者が身震ひを覚えたことを終生忘却しえない。

二七ページにわたるリストは、日本の書よりも洋書の多きこと、それぞれの頭に五種類の記号の付されること、それらは先生が二十代から三十代にわたり読破・評価されし結果なることを思へば、

当時果して比肩しうる方があったであらうか。

昭和十一年四月、評者は東北帝大へ、友人の滝沢寿三・山田忠雄らは東京帝大へ進んだ。右の滝沢が橋本進吉「国語学概論」第一日の様子を報じてくれた。その中で、橋本教授が開講冒頭に「今の日本にて注目すべき学者は二人、岡沢鉦治・山田孝雄の兩名である」とあったのは、昨日の如く鮮烈なる記憶である。今日、岡沢先生を知る方少なしの感あり、いささかしるしたが、なほ『新言語学綱要 人間の進化と言語の進化』（昭和四年七月刊）の名著あることを銘記して頂きたい。これらについての本辞典の記述はない。

本辞典に記述なきを列挙するも如何かと思ふが、あと一つ『伊呂波韻』をあげる要を感じる。本書の古写本については既に山田忠雄「伊呂波韻の古写本」（長坂先生古稀記念図書学論集）所収、なほ刊後補正せる別刷あり）あり、また同じ山田君の近刊予定『近代国語辞書の歩み——その模倣と創意と——』の中にも言及ある模様である（内容見本の目次より）。評者も『国語国文学』（福井大）にて再度板本のいくつかにつき述べたことがある。『聚分韻略』『節用集』などとともに近世において注目すべきものと私考してゐるが、何故か本辞典においては取りあげない。ほかに類する例はあるが省略する。

利用者が項目の解説とともに各種文献のリストに接しうるのは便利である。その点よりすれば「国語学関係参考文献一覧」はありがたいといへよう。この中にて「影印本書目」は旧版同様に至便であるが、講座ものの内容一覽にはすこしく首をかしげた。講座の数ばかりに多いが、内容は種々雑多である。大した内容のものでもないのに、ある講座に入つてゐるがために題目・氏名が示されてゐるとうけとれるものもある。誰よりも本人自身が赤面の状態ではな

らうか。これらの掲載を否定はしないが、むしろいい加減な講座の内容よりは雑誌の論文名を示す方がより肝要である（紙数の点で無理かもしれない）。

戦前における索引は『万葉集総索引』のほかはないに等しかったが、戦後は索引の洪水といへる。内容のよしあしは別として、索引の情報が望まれる現在である。したがつて、此頃だけのことに限定しても『国語年鑑昭和47年版』『国語学研究事典』『国語語彙史の研究1』などにはいづれも「索引目録」があり、重宝がられてゐる。これらと同様に本辞典にもさうしたものがあれば一層便利だったらうと思はれる。

国語研究において、研究の資料が根本なることはいふまでもない。さうした配慮からでもあらうが、いたるところに写真が示されてゐる。しかし残念ながら、折角かかげながら不鮮明のものが少なくない。一々あげるまでもなからうから、二三の例にとどめるが、たとへば二七ページの『一字頂輪王儀軌音義』、三三ページの『延暦儀式帳』、二四ページの『落葉集』、八四ページの二つの往來などなど、なんのために写真を示したのか理解に苦しむほどである。一方には、ひろくとつてあり、よく分るものもあるのであるから、その辺のこまかい配慮がほしかった。二〇八ページの『干椽字書』の如く鮮明なものがあることはあるが、刊年・所蔵者につきしるすところが無い。かうした例は他にもある。

研究文献については望蜀の感はいくつかある。言語学の参考文献につき外国人については何故に翻訳のみ（一〇五八→一〇六〇）をかかげたのか。この中には原書名と翻訳名と異なるものはいくつかある。本文中より一例を示せば Jespersen の Mankind, Nation

and Individual from a Linguistic Point of View に於ける『人類と言語』(五三五頁)の如き。訳書名を項目にしたといへばそれまでであるが、利用者に対してこのことは親切なのであらうか。評者は原則として翻訳書のみを用ぬ平素の考へよりすれば首をかしげざるをえぬのである。これらに関連し、なほ述べたきことあるも省略する。

いはでもが如きことに思はず紙数をとりし故、以下重点的にしるす。

世界が狭くなり、各方面の研究において学際的なものが多くなってきた。日本語についても国語学「プロパー」にて考へる面とともに、世界の言語の中の一つとしてのことばといふ点から見るべき面が少なくない。そのことは同時に研究方法についてもいへることである。それらのことが、一つの項目において、あるいは関連するものを連続してかかげてあれば一望し鳥瞰するのに便利であるが、五十音順の項目の排列となると、あちこちをその関連によって何度もひかねばならない。そのことが引きにくい原因の一つにもなつてゐよう。

国語学の大辞典であるから、評者はもとよりだが多くの方はまづ「国語」「国語学」「国語学史」、更に「言語」「言語学」などをひいてみると思ふ。これらの項目をよんでみると色々考へさせられることがある。これらの執筆は一々しるすまでもなからうが、亀井孝・林大・池上頑造・服部四郎氏らによる。各氏とも平素評者の畏敬する方々であり、それぞれの執筆内容に異論を唱へるつもりはないが、感じたことにつき寸言しておく。

「国語」については〔狭義〕〔広義〕の両面より、「国語学」につ

いては名称としての日本語学といふ点からも説かれる。亀井・林両氏とも積年の学殖よりのほとばしりと拝見することができるが、国語学の領域における(一)から(三)の面についても、なほ考ふべき面があるのではないかと私考する。△記号▽の語は屢々用ゐられる(頃日、記号についての記号学、関係の学会、それらの情報は新聞紙上にもにぎやかである)。△記号▽の語のしきりに用ゐられるのはいいのであるが、現実には古代以来の資料と対決するときに、個々の資料に対して、個々の記号論は如何に展開せられるのであらうか。

「国語学」の項目内においては勿論具体例を望むこと自体スペースの上で無理であらうが、他の項目において、すなはち個々の研究分野・研究方法更に各時代の資料の項目において、「国語学」の項目に示されたことについての具体的な実証を見うるであらうか。評者のよみが浅いかもしれぬが、期待通りとはいかぬ思ひである。そのことは「国語学」の項目の中の△記述▽についても同様である。記述・規範などのことは、文献の上においても言語地理学の上においても、常に中心たる事柄である。それらの具体例の各項目との関連の示し方にあと一工夫あつてしかるべしであつたらう。

国語学にかぎらぬが、学史のことはまことに肝要であると考へてゐる。「国語学史」の項目において「国語」「国語学」の項目よりずっとスペースをとつたことは結構と思ふ。池上氏の執筆も整然たるものとして拝見した。ただ評者のささやかな体験からすると、大学における課外の仕事であるが、一週に一回三時間乃至四時間をかけて数年間継続して国語学史を扱つたことがある。「国語学史」と題する書は一々あげるまでもなく相当の数である。大学の学生が何百

ページかの『国語学史』一冊を讀了して、国語学史は一往あがりと思ふ者もあるかもしれぬ。今評者の座右にも今までに刊行せられた国語学史がある。しかしそれらはすべて取りあげ方を異にする。当然のことであるが同一のものはない。

一人の研究者の国語学史に対する態度、更にその記述は、その研究者の国語学の体系と直結する。しかも以前よりの一人一人の研究業績について、その業績の書誌的考察・考証が土台となり基礎となる。そのためには宣長なり契沖なりについても、その基礎作業の上に立つて、その人の国語学史が展開される。それは八史Vについての姿勢であり、同時に史観である。その意味よりすれば、池上氏にかざらず何人が「国語学史」の項目につき草するも小異は起りうるのである。このことについても、項目の個人執筆の限界を思ふ。

「言語」「言語学」についてはいづれも服部四郎氏の執筆にかかるとして、「国語」「国語学」がいづれも二ページほどのスペースであるのに対して、この方はそれぞれ数倍のページにわたる。それらの配慮の編集委・執筆者の苦勞はいくらかでも察しうるつもりである。数倍のスペースとはいっても、対象の言語・言語学のひろさ・深さよりすれば微々たるものであらう。服部氏の綿密な筆致はほかの論考にも見られる如く、一字・一句をもゆるかせに読過できぬものであるが、一般初学の者に対して更によみ易くせられればとの感も抱いた。

指定の枚数のこり少なき故、若干氣づきしことを加へておく。旧版にほとんど見えなかったものの本辞典の現れは計量国語学ならびにそれに関連する項目であらう。戦後の三十六年間において、この方面の仕事が計量国語学会・国立国語研究所にて示され、東京女子

大はじめいくつかの大学においても、この方面の講座・卒論なども出現するにいたつた。戦前にはほとんど見ることのなかつた方面である。語彙調査・語彙量・索引といった方向にて欠くべからざる部門となつた。ただし全国的には計量国語学会の会員数は相当あるも、

大会の出席者とか『計量国語学』の執筆者は会員数に比しはるかに少ない。各大学にてこの方面につきどの程度の開講あるかは知悉してゐないが多いとは思はれぬ現状である。それに対し本辞典のこの方面にあつたスペースは全体から見ても少なくはないといへるであらう。水谷静夫氏を中心に懇切な解説が見られるが、直接間接にこの方面の業績に関心をもたれてゐる以外の方に、相当の理解を与へえなかつたか。打診してみたことである。ある編集委員は分つてくれるかなと案じ顔であつたが、あるいはさうかなとも思はれる。

変形文法方面についても、奥津敬一郎氏はじめ熱心な執筆があつた。ただし仄聞するところにては、ファッションではないが、学説なり考へ方なりの中には流行的要素も多分にあるとのことである。本辞典の如く計画より刊行まで予定以上の期間を要した結果、本辞典の解説中において、一々は示さぬが既にすぎ去りしと目されるものがあるかと思はれる。これらについては今後なほ吟味すべきであらう。

さきの影印本書目などのところで寸言するつもりではあつたが、マイクロフィルムの書目につき特にあげられてゐないのは如何だらうか。静嘉堂の国語学書はじめ、古辞書の若干についても市販され頒布されてきたものがある。その数は少なしとしない。マイクロフィルムも含めて、この方法によるものは今後逐次増加していくであらう。国文学研究資料館に蔵されるマイクロフィルムについては

リストも既に示されてをり、この業は今後も継続される。この中には国語学の資料としてのものの相当にあることいふまでもない。

執筆者としては国語学に専念してをられる方にて名を連ねられぬ方も相当あり、また直接関係のある古文書・考古学・中国語学などの方面にて、執筆を依頼すべしと思はるる方は一二にとどまらぬい。これらについては、相当にひろく考へるべきではなからうか。

旧版のミスプリントは何百といふ数でただ驚くばかりであった。

この度のは前車のこともあり、ミスプリントなきを期待したのは評者だけではあるまい。しかし披見してみても、数は数へてゐないが、あちこちにミスプリントのあるのには些か力を落した。本辞典は別の角度よりすれば商品でもあるので困ったことと思ふ。『国語学』一二五集の一五二ページには正誤表が近日中に出来上る見込みとあるが、稿了の今（七月八日）、評者の手元にはまだ届いてない。

（昭和56年7月8日稿）

（昭和五十五年九月三十日発行 東京堂出版刊 B5判 一二七二

頁 一九〇〇円）

——金沢女子短期大学教授——